

なんでやねん

發行責任者 倉橋 忠

No. 15

飛鳥文化を支えた
知識・技術は何か

木造建築物では、世界最古の法隆寺。その建築技術には、今日の建築技術さえしるものも秘められている。たとえば、今日の木造建築物では、釘やかすがなどの鉄製の建築材が使用されている。しかし、法隆寺には、そのような鉄製のものはおろか、金属製の建築材は木部を補強するためには一切使用されていない。

木造建築物の耐震性を強化する（地震に耐える力を増すこと）ために、今日の建築技術では、そのような鉄製の物が使用されている。それに対して、法隆寺では鉄を使用しないで、震度 6 以上の地震にも耐えられるように建築されている。

また、鉄を使った木造建築物は、長持ちしても100年が限度とされている。しかし、法隆寺は多くの地震に耐えながら、1000年以上も生き残っている。

このような、すぐれた技術を、だれが考えだし、どのような人たちが実現したのだろうか。

・高麗(高麗)は地置の略、ゆつくりと形になつて漸撃を繰り返す高麗(高麗)に似た免露構造になつてゐるものが三十日までに、全島獨立を証明研究するの調査でわかつた。國史(註)草安時代(十世紀末)に高麗6級の地置が記されたが、略に被害がなかつた高麗の秘密が数値上と裏付けられたことになる。

高層ビルに似た免震構造と
わかった法隆寺の五重塔



法隆寺

構造高層ビル並み

[illegible]

構造 高層ビル並み

読 売 (大版)・朝刊	96・10月1日(火曜日)
-------------	---------------

地震に強い五重塔しなりが決め手

また、教科書や資料集には出てこないが、飛鳥時代には、「時刻」が刻まれていた。^{ろうくこく}「漏刻」と呼ばれる「水時計」だ。水が一定のリズムで落ちることを利用して、「時刻」をはかっていたのだ。

法隆寺など多くの寺院に今日まで伝わる、飛鳥時代の仏像たち。これらの仏像には、朝鮮半島から渡来した仏師たちの知識と技術が生きている。「日本の文化」と言われるこれらの文化遺産を作り上げたのは、果たして「日本人」と言えるのだろうか。

それとも、それらを「日本の文化」「日本人」だと言うのであれば、「日本人」という言葉の意味を考え直さなければならないであろう。なぜならば、従来、「日本人」という場合には、「外国」の血をひかない「純粋な日本人」という意味合いで使用されてきたからである。

水時計への 導水路出土

初の水源地施設

つと見られており、水時計台の水源施設としては初めての出土。石敷き広場は水時計台の周囲を広く取り囲んでいたらしく、同発掘調査部では「水落遺跡の全容解明へ貴重な手がかりになる」としている。

日本最古の水時計「漏刻」圖とされている奈良明日香村の「水落遺跡」で、石組み溝や石敷き広場が見つかり、12日、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が発表した。石組み溝は水時計台への導水路の一



瀬刻とみられる建物跡近くでみつかった石組み溝や石敷き広場——12
日午後一時、奈良・明日香村

寺（飛鳥寺）の楓の樹」の
広場との関連も注目され
る」と話している。

同発掘調査部では「石垣
み溝は水時計への導水路
ひとつで、石敷広場は古
時計台の周壁を取り囲んで
いたとみられる。この遺基
が飛鳥寺の西側にあること
から、大化の改新を進め

また、石敷き広場は、組み清から十五層ほど離たところで見つかり、直徑二十・三十センチの石を東西各層以上、南北二十一層以上にわたって敷き詰めた部分と、さらに直徑十五センチ

石相模の出土場所は、刻とされる方形礎石建物の南東側。幅、深さとも五十センチ、長さ約十センチの溝の両側に直徑五十一センチの石が整然と並んでいた。溝は約十センチの高低差があった。

産経(大阪)・朝刊 94・10月13日(木曜日)